



宇部市・光市 視察報告

環境政策と学校の将来像

令和8年1月19日 宇部市役所
令和8年1月20日 光市教育委員会

日本共産党飯田市議団

報告用スライド

視察の狙いと全体像

宇部市

環境政策・SDGs・地域循環

- ・公害克服の歴史が、現在の環境政策へどう継承されているか
- ・再エネ、資源循環、環境学習の運用を確認
- ・飯田市の環境政策へ活かせる視点を整理

光市

学校の将来像・施設一体型への歩み

- ・基本構想からやまと学園スタートまでの政策形成プロセス
- ・9年間一貫教育、施設整備、地域協働、合意形成の確認
- ・飯田市の学園構想との違いを具体的に把握

1/19 宇部市役所 14:00-15:20

1/20 光市教育委員会 10:00-11:30

宇部市の視察ポイント

「公害克服の経験」を、現在の環境政策と人づくりへどうつないでいるかを学ぶ。

山口県南西部の工業都市。人口15.4万人、面積約289km²。石炭産業を基盤に発展し、戦後はばいじん公害を経験。その克服過程で形成された「宇部方式」が、現在の環境行政の土台になっている。

公害克服

SDGs未来都市

環境学習

視察で確認した主な論点

- ・ 2030年へ向けたKPIの追い方
- ・ 再エネ導入と地域エネルギー事業の連携
- ・ 学校・企業・市民向けの出前講座と探究支援
- ・ ごみ減量化と資源循環の仕組み



宇部市山形壩所（宇部市公式）

宇部方式から現在の環境政策へ



1950年代の宇部市（宇部市公式）

1 情報公開・科学的測定

ばいじん濃度や健康影響を可視化し、市民と共有。

2 産官学民の協働

企業・行政・研究者・市民が協議の場を持つ。

3 自主的な環境投資

集じん装置、燃料転換、輸送道路整備などを実施。

4 未然防止の思想

訴訟型ではなく、対話と合意形成で改善を進める。

5 国際評価から次の政策へ

1997年UNEPグローバル500賞。今は脱炭素・循環へ発展。

独自の環境教育 ・ 探究支援

▶ 「せかい！ 動物かんきょう会議」への参画 動物の視点から人間の活動を客観視する国際会議型学習

▶ 予算制約がある中での「独自教材（カードゲーム）」の作成

光市の視察ポイント



「施設一体型小中一貫校」をどう準備し、どう地域に浸透させたか（浸透したのか）を学ぶ。

山口県東南部の臨海都市。人口約4.7万人、面積92.13km²。光市では基本構想を起点に、小中一貫教育を土台としながら、施設一体型のやまと学園へ段階的に進めている。

15歳の姿の共有

9年間一貫教育

地域・家庭・学校の協働

説明会と合意形成

学校の概要（統合の枠組み）

光市には元々、小学校11校・中学校5校がある。

中学校区での学園構想（島田川学園、やまと学園、あさなえ学園、光井学園、室積学園）

4小1中が2学園、1小1中が3学園

やまと学園に統合された小学校：岩田小学校、三輪小学校、東荷小学校、塩田小学校

小学校の再編を優先し、令和7年4月に大和小学校を開校

新たな施設は令和10年供用開始予定（現・大和中学校敷地）

基本構想からやまと学園へ

光市の特徴は、理念を先に示した後、準備委員会・候補地比較・予算化・通学支援までを段階的に具体化している点にある。



光市と飯田市の比較

比較項目	光市	飯田市
目的・問題意識	小中一貫の効果をさらに高めるため、施設一体型へ。	既存の成果を土台に、9学園構想で一貫性を高める。
基本モデル	中学校区単位で、施設一体型を明確に目標化。	当面は既存施設を活かす施設分離型が基本。
教育の考え方	距離の課題を解き、教育効果を高める。	みらい創造科とコミュニティスクールを重視。
進め方	どこから着手し、どう段階化するかが中心。	学園ごとの目標共有と地域参画の枠組みが中心。
地域との関係	理解を得ながら、工程を示して進める。	教育活動への地域参画を学園構想の土台に据える。

一言でいえば 光市 = 「施設一体型を段階実装」 / 飯田市 = 「教育内容と地域協働を核に展開」

教育の特色（4-3-2制の導入）

発達段階に合わせた区切り
 前期（1～4年）：基礎・基本の定着
 中期（5～7年）：活用力の育成
 後期（8～9年）：発展・深化

4-3-2制の学び



小中一貫校での乗り入れ授業



教員の交流 乗り入れ授業の展開

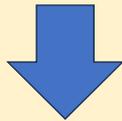
まとめと今後の展望

やまと学園が目指す姿

自ら考え、行動する児童生徒の育成

地域への愛着を持ち、次世代を担う人材の輩出

「大和は一つ」を合言葉に、新たな伝統を築く



一つ忘れ物が・・・